

老舍研究会会報 第18号

胡絮青女士 題字

“多”、“少”、“快”、“硬”の人 — 傅光明さんのこと —

日下 恒夫

“多”

傅光明さんという人を語るのにふさわしい形容詞で、まず思いつくのが“多”である。

なんといっても仕事の量が多い。業績のすべてを詳細に羅列すれば、それだけでこの会報数ページ分の文字が必要になる。

傅光明さんといえば、中国現代文学のさまざまな作家の研究を手がけてこられたが、なかでも蕭乾、冰心、徐志摩、老舍、林海音などの研究者として著名な方である。とりわけ蕭乾に関する研究は早くに台湾で評価され、『人生的採訪者—蕭乾評伝』（台湾智燕出版社 1990、のち山東画報出版社 1999）と題して出版され、それを皮切りに、文字通り陸続と著書を公刊されている。付録の略目を一見するだけで圧倒される思いである。

だが、傅光明という名が、わたしたち老舍愛好家にとって身近なものとなったのは、『老舍之死採訪実録』と『太平湖的記憶—老舍之死』の出版によってである。

わたしはかつて前者についてこんなことを書いたことがある。

「老舍関係の重要な書物がもう一冊加わった。

八五年に『北京人』が発表されて以来、「インタビュー文学」は大流行であるが、この証言集は老舍の最期だけに焦点を絞った貴重な一冊。老舍という作家の死を通して一度文革とは何であったかを考えることになった。このように微妙な話を引き出した聞き上手の傅氏の技量に感服。氏の童顔を前に、言わなくてもいいことまで思わず口にしてしまった人もいるに違いない。もとより語り手によって温度差があるので、今後は、告白や回想にありがちな誤解と歪曲を取り除きながら行間を読み解く作業が必要となる。」（『中国図書』12-3）

さらにその姉妹編というべき後者についても、「これもまた老舍の死に名を借りながら『文革』の見直しを迫る書物である。」と同じようなことを書き、「今となっては信じられないことであるが、すべての出版活動が停止していた文革中にひとり活躍した『文革』を象徴する作家、浩然の証言が収められているのが珍しい。この作家にとっては今もすべてが自分を中心に回っているらしい。」（同 13-3）などと、少し余計な一言も入れてしまったことがある。

わたしはこの二冊を読みながら、「人間というものが何を語るか」を知ることだけでも難しいのに、「何を語らないか」を知るとはさらに難しいことだと感じたものだ。

だが、その至難の業を実行したうえで、傅さんは近く老舍論をおまとめになる予定であるときく。細心の調査と鋭敏の思考を経て、これまでの老舍論とはひと味もふた味も違うユニ

ークな著作が出現するに違いない。いまはその書の出現を鶴首するばかりである。

ところで、この二冊の書物を見て、傅さんがこれまでの研究者タイプとは違うとばかり言いたてるのは失礼というものだ。傅さんはむしろ伝統的な「文人」と称するのがふさわしい。書ける人でもあるからだ。

調査報告や研究論文は書いても散文エッセイを書ける人はかならずしも多くない。読ませる文章が書ける人はなお少ない。2002年に散文エッセイ集『書生本色』（中国文聯出版社2001）によって、第1回冰心散文獎優秀作品獎を受賞された傅さんは、そんな数少ないお一人である。中国作家協会会員は単なるお飾りでない。多能というべきである。

さらに翻訳も手がけておられる。タイトルだけでわたしには何の翻訳か知らないけれど、日本の神話もあるという多彩ぶりだ。

その他、中国現代文学関係の叢書や書籍の主編、講演筆記などは10種以上。さらにアンソロジー類の編纂（「選編」）や浙江文芸出版社の“世紀文存”シリーズや、安徽文芸出版社の“学生必備經典導讀”シリーズといった啓蒙的な文芸選集の類にいたっては枚挙に暇がない。1991年以来、20数種類もの書物を編集しておられる。「略目」を眺めているだけで、まさに傅さんの「多数、多能、多彩、多様」が知られる。

こんなことを言っただけで失礼になるかもしれないが、傅光明という人はまことに“多”の字が似合う人である。

“少”而“快”

“少”はもちろん「少ない」という意味でなく、「若い」という意味である。

傅光明さんはお若い。本当にお若い。しかし書物の上でだけ名前を知っている人は、まちがいなく傅さんのことをずいぶん年配の方であると思っている違いない。中国老舍研究会常務理事などの肩書きを見ていると、ますます老先

生を想像してしまう。

だが、傅さんは1965年5月2日、「文革」前夜のお生まれ、2004年7月現在で満39歳になられたばかりなのだから驚くほかはない。

少し思ひ出話をしたい。もう20年もむかし1983年だったと思うが、老舍研究の旅というものに参加してはじめて北京に行った。そこでわたしは傅さんと会ったのだ。

わたしたちの団体は友好賓館で行われた老舍座談会に参加した。そのとき端っこのほうに、たぶん趙園さんの隣の席だったようにおぼえているが、少し緊張した表情の青年が座っていた。わたしには少年のように見えたせいも、失礼ながら何となく場違いな感じさえしたものだ。北京大学の学生ですと紹介されたのは、いまは中国現代文学館館長の舒乙さんだった。

それだけのことから「会った」というより「見かけた」というだけのことである。もちろん傅さんの記憶にはないでしょうが。

しかし、わたしにはそのときの初々しい印象があまりに鮮明だったので、のちに傅さんの本を手にしたときも、その著者と「あの」青年とがすぐには結びつかなかったものである。

さて、傅光明さんは1986年7月に北京大学分校中文系（言語文学専修）を卒業されているので、直接お聞きしたわけではないが、たぶん中学高校で飛び級を重ねられたのであろう。それだけでも早熟な秀才という感じだ。

大学卒業後は中国現代文学館に勤務されたが、これもまたいわば研究者としては「飛び級」といっていいかもしれない。なお、1986、87年の一時期、進んで安徽師範に赴き“先進個人”に選ばれ入党を果たす。

さて、そのころ現代文学館は設立されて間がないころであり、建物も今のように立派でなく、資料もなく、あっても整理がなされていない、「ないないづくし」の頃だったはずである。将来の文学館らしい文学館への基礎固めの時期

であったといつてよい。そこで若き傅さんは、資料の収集、整理、書誌的な作業など、地味な仕事に没頭されていた。その経験がのちの仕事に役立っているにちがいない。

1997年5月、中国作家協会会員。11月に副研究員となり、2000年には研究員に昇任された。研究員は教授職である。90年代には中国の各地で若手の抜擢が盛んに実行された流れを受けたせいもあるが、これも破格のスピードといつてよい。

むろん昇任の速さと研究価値のあいだに直接の関係があるわけではないけれども、“少”にして“多”の傅さんには、“快”の字も似合うことはたしかである。

傅さんの仕事がこのように多いのは、もちろん仕事に熱心であり、仕事が速いからである。

仕事が速いということはひとつの大きな才能である。人はよく時間をもっとあれば、もう少し優れた文章が書けるのだが、などと言いたがるもの。わたしなど年がら年中そんなことを言っている。だが、実はそういうことを口にする人は、たいていその時点でそれだけのことしかできないというだけのことだ。閑話休題。

とにかく傅さんは“快”にして“忙”であるが、それはまた“能”ということでもある。

“硬”

傅光明さんには“硬”の字もよく似合う。

ご存知の方も多いことであろうが、中国では虹影の書いた小説《K》の発表をきっかけに、文学における虚構と故人の名誉毀損に関する訴訟が大きな問題になっている。

傅さんは、小説でモデルにされた故人の陳西滢と凌叔華の娘さんである陳小滢さんの訴訟代理人として、文学の専門家としての立場から、公判に深く関わっておられるときく。

わたし自身はこの問題についてなにも傅さんの考え方に全面的に賛同するとはかぎらないけれども、傅光明という人が一個の「硬骨漢」

であり、休むことを知らない行動する文人でもあることはまちがいが無い。

こう書いてくると、おのずから思いは老舎にいたる。老舎もまた“少”にして世に出て、“快”と“忙”の中で必死に生き、生涯「筆」を手から離さない“硬”の人でもあった。

というわけで、傅光明とはどんな人かと訊かれたら、ご本人は嫌がられるかもしれないけれど、老舎みたいな人ですよと答えても、さほどの外れにはならないだろう。

* * * * *

[付] 傅光明先生編著略目

著述

《人生的采访者—萧乾评传》1990・8 台湾智燕

《火焰》*张瑞锋 1994・9 华艺

《卡拉马助夫兄弟》*缩写 1994・12 台湾业强

《出逃》1994・12 台湾业强

《中外名记者丛书—萧乾》1994・1 人民日报

《生命信徒：徐志摩》1997・11 安徽少年儿童

《风雨平生：萧乾口述自传》*采访整理

1999・1 北京大学

《人生采访者：萧乾》1999・9 山东画报

《老舍之死采访实录》*采写

1999・12 中国广播电视

《未带地图、行旅人生》2001・1 海天

《太平湖的记忆—老舍之死》*郑实

2001・7 海天

《书生本色》2001・9 中国文联

《生命信徒：徐志摩》2002・4 华艺

《林海音：城南依稀梦寻》2002・11 大象

《老舍之死及其他》2004・7 台湾文史哲

翻訳

《古韵》1991・9 台湾业强 1994・9 中国华侨

图画本 2003 山东画报

《两刃之剑：基督教与20世纪中国小说》

*梁刚 1992・11 台湾业强

《日本：神话与现实》*张卫 1999・4 海南

《观察中国》2001・9 世界知识

主編

- 《中国现代文学名著丛书》1997 太白文艺
《现代名家经典丛书》1~6 辑
1997·9~1998·8 新时代
《书海浮槎文丛》1997·12 湖南人民
《中国现代才女经典文丛》1998·2 北京燕山
《海外名家经典丛书》第1辑 1998·10 新世纪
《学者小品经典丛书》1·2 辑 1998·10 新世纪
《林海音研究论文集》*舒乙 2001·5 台南
《中国现代文学馆演讲录 2000 / 2001—在文学
馆听讲座》第1、2、3 辑、2002·1 华艺
《大师青春剪影丛书》10 本、2002·4 华艺
*鲍立衍
《在文学馆听讲座》第4、5 辑、》2002·8
中国社会科学出版社

選編

- 《萧乾书信集》1991·8 河南教育
《冰心诗全编》*许正林 1994·5 浙江文艺
《徐志摩书信集》1994·7 河南教育
《冰心散文全编》*许正林 1995·9 浙江文艺
《萧乾散文》(上下卷) 1997·5 中国广播电视
《林海音散文集》5 卷、1997·11 浙江文艺
《萧乾文集》10 卷、1998·12 浙江文艺
《茅盾小说》1999·9 浙江文艺
《茅盾散文》1999·9 浙江文艺
《老舍散文》1999·9 浙江文艺
《梁锡华散文》2000·12 浙江文艺
《解读萧乾》2001·3 大众文艺
《曹禹剧作》2001·5 浙江文艺
《胡风散文》2001·6 浙江文艺
《老舍文萃》*郑实 2002·2 文艺艺术
《丁玲小说》2002·3 浙江文艺
《丁玲散文》2002·6 浙江文艺
《孙犁散文》2003·1 浙江文艺
《老舍剧作》2003·1 浙江文艺
《冰心：真爱永存》2003·8 安徽文艺
《朱自清：水木清华》2003·8 安徽文艺
《徐志摩：吻火夜莺》2003·8 安徽文艺

- 《老舍：平民作家》2003·8 安徽文艺
紙幅の関係で各「出版社」の3文字は省略
*印は共著・共訳・共編者などの名前など

老舍研究会研究発表会記録

第1回 1984年3月17日 名古屋大学

1. 齊藤匡史：老舍年譜のいくつかの問題について
2. 倉橋幸彦：『駱駝祥子』評論史略
3. 渡辺安代・高橋由利子：
中国の「本色教会」運動と老舍
4. 藤井栄三郎：老舍の短編小説のモチーフ
と模索について

第2回 1985年7月20日 名古屋大学

1. 雲野葉子：老舍の現代詩について
2. 石井康一：『茶館』について——その
テーマと「新しさ」に関する考察——
3. 日下恒夫：『文博士』について
4. 岡部謙治：『茶館』舞台上演における音声
上の二・三の問題

第3回 1986年7月19日 名古屋大学

1. 倉橋幸彦：老舍作品中における「犠牲」
について
2. 平松圭子：『火葬』と重慶北碚における
老舍の生活
3. 杉本達夫：「文協」の財政と老舍
4. 藤井栄三郎：老舍のリアリズムと
キリスト教
5. 李 玉敬：試从文学欣赏角度谈谈
老舍作品中的北京话

第4回 1987年7月18日 愛知婦人文化会館

1. 劉 孝春：現代文学中的宗教諸問題

2. 倉橋幸彦：「写家」老舎
3. 飯泉彰裕：香港老舎生活歷程展（一）
4. 平松圭子：香港老舎生活歷程展（二）

第5回 1988年7月16日 中京大学八事学舎

1. 杉野元子：『老張的哲学』をめぐる
二、三の問題
2. 金森由美子：『駱駝祥子』をめぐる
3. 大塚秀明：老舎初期の作品に見られる
語法について
4. 高橋弥守彦：『茶館』の版本について
5. 伊藤敬一：老舎短篇小説の研究について
6. 中山時子：『老舎事典』について

第6回 1989年7月15日 中京大学八事学舎

1. 大田加代子：老舎の戯曲にみられる語法
上の特徴
2. 松村茂樹：「小人物自述」に見える老舎
の自伝観
3. 杉野元子：渡英以前の老舎
4. 石井康一：『茶館』成立考
5. 日下恒夫：『猫城記』の評価をめぐる

第7回 1990年6月23日 中京大学八事学舎

1. 岡本俊裕：『茶館』の言葉について
2. 倉橋幸彦：「満族作家」老舎の誕生
をめぐる
3. 日下恒夫：『四世同堂』は本当によみが
えったか
4. 今富正巳：中山高志先生邦訳『駱駝祥子』
の経過について
5. 李 輝：談『从祥子人格结构的变化』

第8回 1991年7月26日 関西大学

1. 孟 丹：孟广来先生的老舎研究
2. 松村茂樹：老舎の文人観および文人趣味
観について
3. 中野耕市：老舎の音感 — 擬声詞の形態論

の特徴

4. 倉橋幸彦：最近の老舎研究あれこれ
5. 尾崎 實：老舎のことば遣い

第9回 1992年7月24日 関西大学

1. 谷川 毅：自らを北京に埋めた男祥子
2. 杉本達夫：老舎の西北旅行
3. 橋本幸枝：『駱駝祥子』の言語特色
4. 牛島徳次：『駱駝祥子』における“概数”

第10回 1993年7月23日 関西大学

1. 倉橋幸彦：“玩兒命”老舎 — 「王氏論文」
をめぐる
2. 布施直子：ふたたび老舎の足跡を
3. 藤井栄三郎：京都老舎を読む会 —
『老舎集外集』を読む中で
4. 柴垣芳太郎：私と老舎

第11回 1994年7月26日 関西大学

1. 布施直子：『剣北篇』を読んで
2. 渡辺武秀：老舎作品の世界 —
笑いの視点から
3. 平松圭子：修辞から見た老舎のユーモア
表現
4. 林 海音：城牆天橋四合院
駱駝祥子滿街跑

第12回 1995年7月28日 関西大学

1. 高橋由利子：老舎ともう一人の英国人
2. 牛島徳次：『駱駝祥子』の注釈について
— 語学的な若干の問題
3. 範 亦豪：雑話老舎

第13回 1996年7月26日 関西大学

1. 花城可裕：『駱駝祥子』についての試論
2. 杉野元子：老舎と蕭乾
3. 藤井栄三郎：『大悲寺外』と『歪毛児』
— 老舎におけるキリスト教

4. 王 端：从阿部谈起 —— 读老舍先生旧体诗
「游日十七首」

第14回 1997年7月25日 早稲田大学

1. 杉本達夫：它、牠、他 —— 「微神」の中のある代名詞について
2. 渡辺武秀：老舎小説の愛
3. 中山時子：ビデオ「老舎」の鑑賞と説明
4. 牧田英二：満州族の現代作家たち
5. 赫 長海：论《四世同堂》的文化批判意识

第15回 1998年7月24日 早稲田大学

1. 弓削俊洋：老舎と相声 —— 「老舎相声」における「笑い」の技法
2. 布施直子：老舎「避暑録話」
3. 武永尚子：『四世同堂』における日本人
4. 伊藤敬一：老舎文学の原点について

第16回 1999年7月23日 早稲田大学

1. 緒方 昭：『四世同堂』にみる弱者への愛 —— 瑞宣像を中心に ——
2. 渡辺武秀：老舎幽默作品中の「悲劇」について
3. 山口 守：老舎とアイダ・プルーイット
4. 藤井栄三郎：「祭子路之岳母文」
—— 老舎文学の一側面について ——

第17回 2000年7月28日 早稲田大学

1. 南雲大悟：丁聡の挿絵からみる老舎小説
2. 大辻富美佳：老舎研究における都市と文学
3. 谷川 毅：老舎最後の声
4. 李 玉敬：『正紅旗下』の旗人

第18回 2001年7月27日 早稲田大学

1. 大辻富美佳：甘海嵐女士の京味儿について
2. 谷口知子：『茶館』における要請表現
3. 倉橋幸彦：『老舎全集』との薄い関わり
4. 杉本達夫：老舎の死をめぐる断想

第19回 2002年7月26日 早稲田大学

1. 稲田直樹：『駱駝祥子』をめぐる
2. 藤井 宏：短篇小説「歪毛児」の特異性
3. 日下恒夫：アメリカから帰った老舎
4. 孫 鈞政：老舎的京味儿语言

第20回 2003年7月25日 関西大学

1. 杉野元子：「我這一輩子」のテレビドラマ化をめぐる
2. 布施直子：国際老舎学術研討会に参加して
3. 伊藤敬一・藤井栄三郎・平松圭子・
布施直子：『中国当代文学史』をめぐる
4. 藤井栄三郎：老舎と私

〈追記〉：老舎研究会研究発表会の記録については、日下恒夫・倉橋幸彦編『近十年来日本老舎研究簡介』（1992・8・23）と『老舎研究会会報』第12号（1998・7・22）にも収録されているが、今号を決定版とする。（事務局）

奇しき縁

吉田 世志子

2001年の秋、私は北京にある現代文学館を訪ねた。館内には書店が併設されている。書店のレジのところ若い係員が座っていたので、「老舎の死に関する本はありますか」と尋ねた。するとその青年は、静かにうなずき、足元から2冊の本を取り出し、そっとケースの上に置いた。そのときの彼の大切なものを扱う、やさしい仕草を私はいまも忘れることができない。その本が傅光明採写『老舎之死』と『太平湖的记忆』の2冊であった。

老舎の死の跡をたどり、当時の関係者を取材

してまとめあげた『老舎之死』と題する本の序文には、こんなことが書いてあった。

「芦が群生する自然のままの太平湖は埋め立てられ、その上に北京地下鉄のターミナル駅が建設された。一代の文豪老舎先生が悲劇の人生を終えた場所は、都市交通の動脈である地下鉄の始発の駅になった。もし『老舎の死』がある種の意味において、すばらしい生活を始めるきっかけとなるなら、太平湖はかえって安らかに眠ることができる。人々が決まった路線通りに走る満員電車に乗り、事故がおきたら大きな悲劇となる。電車がひとたび走り始めると、駅に着くまで停まらない。しかも『文化大革命』という列車は駅を通り越して突っ走り脱線し、車は壊れ、人々は死に、民族の大悲劇を引き起こした。電車に乗っている人は沢山死亡し、名前すら記憶に留められない。老舎は恐らく多くの文化殉難者の最も特別な一人であり、人々は彼を記憶に留めている。しかし今日に到るまで、太平湖の旧跡には老舎殉難の石碑すらない。私たちは自分の心の中の太平湖を決して埋めてはいけない。老舎の死を決して忘れてはいけない」……「このように重いテーマを取材して記事にし、私は微力ではあるが老舎先生の死を、一頁の生きた歴史となるよう手助けし、成功させるよう努力したいと思うのである」この序文を読んで私は感動した。

ちょうど大学院に入って老舎を研究したいと思っていたこともあり、その後も北京に行くたびに現代文学館を訪ねた。むろんきまってその書店にも足を運び、新たに出版された老舎研究の本を買い求めるのが常だった。しかし、著者である傅先生のお話を直接聞く機会はなかなか得られなかった。

ところが思いがけないことに、今年3月、老舎作品を読む会主催の北京旅行に参加させていただく機会があり、ついに中国現代文学館で

傅先生の講演を聴くことができたのだ。

そしてまた、今年の老舎研究会大会は設立20周年を記念して特別講演者に傅先生を招聘することに決まったというのだ。

しかも今度は、自分が現在在籍している大学で、傅光明先生のお話をお聞きすることができるようになった。これだけでも大きな喜びであるが、同時に「奇しき縁」のようなものも感じざるを得ない。それは自分自身がいま「老舎の死」をテーマに修士論文を書いている最中であり、ちょうどそのようなときに、「老舎の死」に関する傅先生の講演をふたたびお聞きすることが叶ったからである。

他の人から見れば独りよがり聞こえるかもしれないが、私にとってはまことに奇しき縁という気がしてならない。

老舎の“普通話”を考える —舒乙氏の講演を聞いて—

谷口 知子

この3月、中山時子先生を代表とする老舎を読む会の研究旅行に参加させていただき、有意義な経験をすることができた。ことに、老舎と『紅樓夢』に関する研究をしてこられた方々の講演を興味深く拝聴することができた。

講演の第2日目には舒乙氏が、『老舎文学今日における意義』について講演された。その中で氏は、老舎の言語上の貢献の第一は、五四期の難解な白話文の言語を改め、一般民衆が理解できることば、つまり北京語を基礎とした口語を用いたこと、第二は、ことばは生き生きとしていなくてはならない、そのためには作品に方言を取り入れる必要があると主張し、老舎の先導の下、文学の大衆化が進

められたことであるが、中華人民共和国成立後の著書『茶館』は標準的な“普通話”によって書かれているとも述べられた。

周知のように“普通話”とは、「北京語の発音を標準音とし、北方方言を基礎方言とし、模範的な現代白話文の著作を文法の規範とする」漢民族の共通語であるが、1956年3月普通話普及工作員に任命された老舎は“普通話”の語彙と文法について、基準になる辞典や文法書の必要性を指摘し、小説・詩歌・芝居などのことばの共通化に努めること、そのためには人民の中からことばを見つけ、その後手を加えること、民衆に通じない、民衆が話さないような欧化文法を無造作に使用しないこと、書面語と口語を一致させるべきであること、欧化文法を参考にすることは特別に注意を払う必要があり、我々自身の文法に似た文法に変え、読んでみてスムーズで、ぴったりにした文章にする必要があることなどを提唱した(1956.8「关于语言规范化」『老舎文集』第16巻 pp.408-409)。

では、老舎の“普通話”とはどういうものか。この点を確認することは、“普通話”の形成と発展を見る上で必要であると考え、文法を中心に調査を試みた。

ところで舒乙氏は、老舎が“普通話”を採用した理由の一つに『龍鬚溝』の地方公演の失敗をあげた。そして、その原因は北京方言の多用であり、『龍鬚溝』の舞台脚本は老舎の原本(1950.9《北京文芸》)の70%が改編されていると舒乙氏は説明した。

この件について老舎は、『龍鬚溝』は方言を多く用いたため確かに表現は豊かだが、別の方面で損失は大きく、広東などの地方で公演する方法がなかったことは、宣伝の役割を制限することになった。他方『西望長安』では、方言を使用しないように極力努め、ほぼ90%は普通話であり、良い出来とは言いがた

い脚本ではあるものの、全国各地で公演された。」と述べている(1957.2「文学语言問題」『老舎文集』第16巻 pp.441)。

そこで、北京語の『龍鬚溝』(1951.1北京：大衆書店印行 1951.4再版)と“普通話”の『西望長安』(1956.5北京：作家出版社第二版)とを対照し、老舎の“普通話”を会話文に絞って具体的に見ていくことにした。なお、北方語の文法特徴は太田辰夫氏の『北京語の文法特點』(『中国語文論集 語学編』1995.5)を参考にした。

なお本稿では、北方語とは河北・河南・山東・東北三省・内蒙古に分布する方言のことである。また、例文の右側のカッコ内には、話し手→聞き手、頁、行を記した。

『龍鬚溝』にはすでに北方語の特徴に一致しない文法や語彙が認められる。

例えば以下のような例がそうである。

*北方語の“今兒(個)”“昨兒(個)”は使用されず“今天”“昨天”を使用。

*北方語の“得”「…せねばならない」以外に、南方で多く使用されている“該・要”が見られる。

“我也該到別處去挨罵。”

(巡長→丁四 p.16L9)

*行き先を表す介詞は、“上”より南で多く用いられている“到”“往”の使用が多い。

“你到茶館酒肆去。”

(大媽→趙老 p.11L6)

また、『西望長安』には北方語の特徴と異なる点が『龍鬚溝』より多く使用されていることに気づいた。例えば、

*名詞接尾辞“兒”が字面では“这里、那里、哪里”“孩子、戳子、棍子”と書かれる。

*“多咎”、“赶明儿”などの不使用。

特に『龍鬚溝』と異なる点の1つは、禁止表現の副詞に北方語の“別”以外に、“不要”が同じ頻度で使用されていることである。

“这个番号千万不要告诉别人。”

(程二立→栗晚成 p.14L21)

“不要这样着急。”

(ト希霖→栗晚成 p.30L6)

さらに興味ある現象に動詞の“沒有”があげられる。『龍鬚溝』では大部分が“沒”だった。しかし、『西望長安』ではほぼ全部が“沒有”である。

また進行表現に“正在”が使用されていた。

“我正在考虑！”

(栗晚成→达玉琴 p.54L12)

『北京語の文法特點』によると、“正在”は『離婚』(老舍著 1933)の地の文にごく稀にみられるということである。

このように見てくると、『西望長安』の“普通話”は現在の“普通話”に比較的近いことばで書かれていると思われる。

では、『茶館』はどうなのだろう。舒乙氏の指摘のように標準的な“普通話”で書かれているのだろうか。今後の課題にしたい。

老舍関係文献略目 (7)

倉橋 幸彦 (編)

【2001年〈上半期〉・補】

齋藤匡史「老舍小説の食譜——長編小説『駱駝祥子』篇」

『東亜経済研究』第59巻第3号 (山口大学東亜経済学会、1月31日)

p. 39-74

*「本稿は長編小説『駱駝祥子』に現れる「食品」を〔☆174条〕収録し、物語展開、文脈におけるそれらの意味を分析、考察するものである。」(p. 41)

青龍子「太平湖」

『旧京私記——北平外史』(3月30日、西田書店)第一章 西直門内外(二)、p. 25-36

*「「老舍、太平湖に入水」／が報じられ続いて／「西直門外太平湖」／と伝えられるにおよび、その死を悼むとともにいささか混乱に陥らざるを得なかった。／北平の太平湖は一九四五年当時まで旧城内二区西南隅に存在した沼沢を称していた。」(p. 25)

*「この太平湖を知る老外士には老舍入水の報に／「あのような沼沢に舍身とは？」／の不審と／「何故太平湖に？」／の疑念に続き、混乱に拍車を駆けられたのは／「西直門外太平湖」／の報であった。不明にして老外士は西直門外に太平湖のあるのを知らなかった。／『北京地名考』〔★註(一)3「松本民雄編著 一九八五年 朋友書店」〕は／解放前まで北城の西南隅に太平湖という湖があった。その水は西南の角楼の北から護城河に注いでいた……／北京にはかつてもうひとつの太平湖があった。それは徳勝門外をやや西へ行った護城河の北側にあった。周囲五百メートルほどの湖である。もとは「臭葦塘」といい、荒れはてた沼だったが、一九五八年に改修工事が行なわれ「太平湖」と名づけられた。……その後太平湖は埋め立てられ、現在では列車の修理工場になっている。／と説明している。／この説明文前半の「北城(内城)太平湖」は旧来の太平湖を指しており異存はないが、後半冒頭部分の紛らわしさは明らかに錯覚を起こさせてしまうであろう。／「かつてもうひとつの」の「かつて」は読者をして前半の「解放前」を予想させるに十分であり、更に「もうひとつ」と添加されては旧時の記憶を混乱に陥れてしまう。この「かつて」は明確に「解放後」と表記すべきであろう。／この時間差により「西直門外太平湖」は解

放後の改修造成による湖水であることが知られ、かかる故都の変遷を知る由もない解放前に追放老外士にも得心させられる。しかしこの造成湖を何故に太平湖と呼称したのかその由来は不明である。老外士の新・旧太平湖に拘泥するのは、別に北平の水利・用水、即ち供水・排水に深く関わるが故であり、更にはまた老舎の傷ましい舎身の痛惜に因るといえるであろう。」(p. 26)

***「傷ましい老舎の舎身に少しく触れておきたい。本来、尊厳なる死への憶測は避けるべきであるが、その非礼を承知しつつもあまりに傷ましい老舎の死を悼みその挽歌に代えたい。老外士は老舎の舎身を文革の理不尽な非人間的無差別暴力的破壊への憤怒と、旧都への黍黍悲嘆ではなかろうかと思えてならない。／舎身に新太平湖を選んだ老舎の心情は察するべくもない。後湖〔☆『文豪老舎の生涯』参照〕が嗣子の憶測する老舎の母の死歿地〔★註(二)7「西城区(旧内四区)観音庵胡同六号。老舎は母親馬氏のために一九三三年購入。母親は一九四二年夏、歿した。それ以前は同区前桃園二十五号に居住していた。両処とも西直門内西北隅に位置している。〕に近いということも、無縁ではないであろうがなにかまだ釈然とし難い。確証的ではないが、この太平後湖に老舎は故都『想北平』〔★註(二)8「一九三六年『宇宙風』十九期に掲載された老舎の代表的短編である。近来、日本側北京関係書中に多く引用されている。殊に「面向着積水潭……」以下の一節は再三引用されている。／本稿は一九七五年 香港 文化生活出版『北京的回憶』掲載文を参考、引用した。他に一九八九年 重慶出版『故都北京社会相』にも掲載されているが、誤植・誤記が多く参考にならない。〕的風光を映じたのではないかと思われる。」(p. 33)

***「旧都の日常がこれほど具体的に淡淡と描かれた作品〔☆『想北平』。なおこの作

品については、第一編「序」(p. 15)にも触れられている。〕は他には見られない。／老舎の旧都に寄せる深い思いは切切と迫ってやまず、北平を追放された老外士をして時の流れに消えていく旧都への哀惜を覚えしめずにはいられない。／無法な文化大革命の暴力的破壊の拡大化と故都の消滅、旧都の文化終焉の悼みに耐えず、悲壮な舎身に託した旗人老舎の抗議に辞も失い痛惜するほかない。」(p. 34)

◇「著者紹介」に、「青龍子(せいりゅうし)／本名 **石橋昭雄** 1928年、北平にて出生／近代中国史研究所主宰／主著『王枢之攷』」とある。

【2002年〈上半期〉・補】

加藤 徹『京劇 — 「政治の国」の俳優群像』

〔中叢書〕(1月10日、中央公論社)

*「例えば、漢字廃止論者であった中国語学者の倉石武四郎は、驚異的なロングセラーとなった著書『漢字の運命』(初版、一九五二)の冒頭〔☆〈老舎のいう文明的野蛮・野蛮の文明、それは中国文化の悲劇的性格である〉(同書 p. 2-4)、なおこれは日下恒夫・倉橋幸彦共編『日本における老舎関係文献目録』(朋友書店)1984年9月1日)にも収める。〕で、京劇の打撃楽を「中国文化の悲劇的性格」の象徴と決めつけ、漢字論の枕にした。／倉石はまず、老舎がイギリス留学中にロンドンで書いた小説『趙子曰』のなかで、「たとえば中国に一度でも行ったことのある人なら誰でもまず驚くにきまっているあのやかましい音楽」(倉石、前掲書)／について述べた部分を、左のように引用する。／こうした銅鑼や太鼓のやかましい音楽は、世界中でただ野蛮な民族と文明の中国人だけが楽しむ。この意味で中国の文明は世界にも比類のない「野蛮状態を保存した

文明」である。野蛮人は大銅鑼や大太鼓大ラップを好むが、中国人も大銅鑼や大太鼓大ラップを好む。野蛮人は亀や狐や兎を崇拜するが、中国人は今になってもまだ亀や狐や兎を崇拜する。ただ野蛮人は銅鑼や太鼓を聞いてもそれが何調だか何拍子だかわからないが、中国人にはわかっている。野蛮人は亀や狐を信じるだけであるが、中国人は亀や狐以外のものを信じる。してみると中国の文明とは老舗の専売特許で、古代の野蛮状態を保存した文明である。こういった特別な文明は文明的野蛮ともいえるし、野蛮的文明ともいえる。／倉石は、右の引用のあと、／「実はこれほどよく中国文化の悲劇的性格をつかんだ表現は少ないとわたくしは思う」（倉石、前掲書）／と述べ、漢字および中国語はきわめて原始的な性格をひきずる言葉である、と論じた。／半世紀後の今日では、このような見解は古びてしまっている。〔☆後略〕／筆者は、現代の高みから先人の見解を嘲笑しようとは思わない。ここでは、倉石らの限界を惜しみつつ、京劇を中国の後進性の象徴として指弾する風潮があったことを指摘しておきたい。」（第三章 近代化への苦しみと京劇〈やかましい銅鑼の音は野蛮か？〉 p. 80）

*「民国革命、およびそれに続く中国革命は、イデオロギー闘争」「体制闘争」であると同時に、本質的にはエスニック・グループの闘争であった。／〔☆中略〕／例えば中華民国成立直後の民国（一九一三）。新しい中国の国語をどうするかをめぐって、新政府は「国音統一会」を設けた。会の議長になったのは、日本にも留学経験のある呉敬恒。彼を含め、会の構成員の大半は南中国出身だった。／北京語には濁音はないが、江蘇・浙江省の方言には濁音がある。議長の呉敬恒は、濁音も採用しようと強硬に主張し、／「濁音とは元氣の象徴である。ドイツ語は濁音が多いから国

が強い。わが国が弱いのは北京官話に濁音がないからだ」／とルサンチマンまるだしの意見を述べたあと、自分の方言で故郷の芝居をひとくさり唱ってきかせるというパフォーマンスまでした。／漢民族が一枚岩ではなく、実は強烈なエスニック意識を持つ集団の集合体であること、南方人が北京的なものを嫌っていたこと、などを象徴する逸話である。／魯迅が京劇を嫌ったのも、彼が浙江省紹興の人であることと無関係ではない。／彼とは対照的に、北京人で満洲人である作家の老舎は、自由自在に北京語をあやつり、長編の傑作小説を次々に書いた。彼の小説や随筆には京劇がたくさん出てくる。時には京劇のやかましい音楽を揶揄したりするものの、老舎にとって、北京語と京劇は、自分の皮膚や空気にも等しい存在であった。／いっぽう南方人である魯迅にとって、北京語は「準外国語」であった。それゆえ彼は生涯、短編小説しか書けず、その文体も外国人が書いた中国文のようにぎこちない。当然、京劇も苦手であった。」（第三章〈魯迅、毛沢東と京劇〉 p. 83）

*「六六年八月二十三日、北京で、世界を震撼させた「孔廟事件」が起こった。／炎天下、造反派は「四旧打破」のスローガンを唱えつつ、文芸界の幹部たちを北京の孔子廟に連行し、暴行を加えた。地面には、京劇団から運び出された数十箱の衣装類が山と積まれ、火を放たれた。造反派は、作家の老舎（〔☆略〕）・蕭軍（一九〇七—八八）、京劇俳優の荀慧生〔☆（一九〇〇—六八）〕・馬富禄（一九〇〇—六九）らを、燃えさかる炎の前に地べたにひざまずかせた。そして、大声で罵りながら、ベルトや棍棒で打ち、殴る蹴るの暴行を加え、頭髪を手でむしりとった。／〔☆中略〕／京劇に造詣が深く、中国屈指のユーモリストであった老舎も、造反派の魔手を逃れることはできなかった。文革後の七八年、

老舎の未亡人は、孔廟事件の日のことを有吉佐和子に語った。／〔☆以下『有吉佐和子の中国レポート』（新潮社、昭和54年3月5日、「老舎の死について」p.36）からの引用は略す。〕／この事件の翌日、老舎は妻の制止を振り切り、午前中に「文連」へと出かけた。それきりだった。翌二十五日の夜、妻のもとに見知らぬ男の声で電話がかかってきて、北京の太平湖のほとりに老舎の死体がある、と告げた。妻が駆けつけると、真夜中の雨の暗がりのなかに、ムシロをかぶせた遺体があった。妻は、ムシロの下の夫の遺体の着衣も乾いており、腹部に水がたまっている様子がないことを確認した。しかし文革当時のこととて、死体は検視もされぬまますぐ火葬されてしまった。その後、彼は入水自殺したという噂が広まったが、真相は今日も不明である。」（第七章 革命模範京劇の時代〈炎と寒風と — 笥慧生・老舎らの迫害と死〉p.263）

◇他の老舎関連箇所は、同書「索引」を参照。

安保華子『北京 胡同に生きる』〔NHKスペシャル 古都物語〕（5月30日、日本放送出版協会）

*「自らも胡同の四合院に暮らし、庶民の生活を描いてきた中国の代表的作家、老舎は、北京への思いをその随筆『想北平』（「北平」は北京のこと）の中でこう綴っている。／「私は本当に北平を愛している。北平は私の血中にあり、私の性質や性格の多くはこの古都から与えられたものだ。ゆりかごの中で静かに眠る子供のように、心の中は完全に静かで安らぎ、求めるものもなく、恐れるものもない。北京〔★ママ〕にはにぎやかな場所もあるが動の中に静がある。どんな場所も込みすぎず、辺鄙すぎない。どんな小さな胡同の家にも庭と木がある。どんな広々とした場所も商店街と住宅街ははなれていない。このバランスは

私の経験では天下第一だと言える。（中略）北平の良いところは設備が完全ではなく、あちこちに隙間があって、それが人を自由にさせる呼吸にある。ここには本や骨董が多いので学のある者や骨董を愛する者は当然北平が好きだ。北平は都城だが、花や野菜、果物が多く、人を自然に近づけている。……これ以上言うまい、泣きそうになってしまう。本当に北平がなつかしい」（p.104）

【2002年〈下半期〉】

呉 綿季・石川正人共訳

『張さんの哲学 近代中国 庶民たちのフィロソフィー』

（7月7日、武田書店（藤沢）、A5版、本文二段組249+（一段組11）頁、定価1800円+税、カバー、オビ）

◆著者近影 1頁／（石川正人）はじめに 2頁／主な登場人物 2頁／目次 5頁／張さんの哲学 p.1-239／（呉綿季）解説：老舎一人と作品 p.240-244；『張さんの哲学』について p.245-249

『老舎研究会会報』第16号（7月26日）

◆倉橋幸彦「上海で甦った老捨 — 大型歴史話劇『正紅旗下』上演パンフレット雑感 — 」p.1-2／高屋亜希「老舎『月牙兒』随想 — 「食べられる」ことを巡って — 」p.2-3／平松圭子「「青島与我」二則」p.3-4／岡田祥子「胡絮青女史を偲ぶ会に出席する」p.4-6／杉本達夫「張桂興編『《老舎全集》補正』の意義」p.6-7／谷川毅「老鄭実・傅光明『太平湖の記憶—老舎的死』」（書評）p.7-10／渡辺武秀「『老舎と二十世紀』について」（書評）p.10-12／倉橋幸彦「老舎関係文献略目(5)」p.12-15：【2000年】【2001年上半期】／「老舎研究会会報第15号（2001年7月）掲載目録」

飯塚 容「北京人芸の五〇周年」〔ワールド・カルチュア・マップ 中国〕

『ユリイカ』第34巻第10号

(青土社、8月1日) p. 212-213

* 「北京人民芸術劇院（以下「北京人芸」）は劇作家・曹禺を院長として、一九五二年六月に設立された。北京市所属の劇団である。」(p. 212)

** 「その北京人芸が今年、創立五〇周年を迎えた。これを記念して同劇団は、五月末から七月初にかけて合計八本の芝居を連続上演している。また、六月一日から二日まで「北京人芸五〇年・話劇論壇」と称するシンポジウムを開催した。」(同)

*** 「北京人芸のレパートリーは三種類に大別できる。第一は曹禺、老舎、郭沫若ら老大家の古典的名作、第二は李龍雲、劉錦雲、何冀平ら同時代の劇作家たちの作品、第三はシェイクスピア、ゴーリキー、ブレヒト、チャーホフらの外国劇である。／第一の名作劇は北京人芸の至宝と言ってよい。曹禺の『雷雨』『北京人』、老舎の『茶館』、郭沫若の『虎符』『蔡文姬』などは、五〇年代から今日に至るまで繰り返し上演されている。『雷雨』（一九五四年初演）のキャストは一九八九年に若手へのバトンタッチが行われたが、演出は夏淳のものを引き継いでいる。その他のレパートリーもほぼ同様で、俳優は変わっても従来の演出法が忠実に守られてきた。ただし、『茶館』（一九五八年初演）は少し状況が違う。焦菊隱、夏淳演出による新版がキャストを一新して再登場した。／第二の同時代作家の作品の多くはリアリズム劇である。李龍雲の『小井胡同』（一九八五年）と何冀平の『天下第一楼』（一九八八年）は、それぞれ老舎の『龍鬚溝』（一九五三年）と『茶

館』を受け継いだ成果と見ることができよう。」(同)

*** 「さて、五〇周年記念上演の演目のうち、大劇場の作品は『犬おやじの涅槃』『天下第一楼』『雷雨』『蔡文姬』『茶館』の五本だった。「郭老曹」〔☆略〕が各一本、八〇年代の名作が二本で、妥当な選択だろう。ただし、近年の収穫がないのが少々寂しい。

〔☆中略〕ちなみに十年前、北京人芸四〇周年を思い起こしてみよう。記念上演のラインナップは、『犬おやじの涅槃』『雷雨』『セールスマンの死』『李白』『天下第一楼』『茶館』『舞台の上の真実の物語』『紅白喜事』の八本である。オールド・レパートリーは『雷雨』『茶館』の二本、その他はいずれも近作で、しかも一様に水準の高い芝居だった。」(p. 213)

稲田直樹「老舎「非業の死」闇に迫る◇中国の代表作家の「読む会」「研究会」で奔走◇

『日本経済新聞』10月14日〈文化〉

* 今年で発足五十一年になる「老舎を読む会」で、毎日曜、老舎の格調高い北京語で書かれた作品に親しんでいる。大学時代、中国語を習った私はプラント会社を定年退職後、六年前「読む会」に入った。会員は教師、学生、サラリーマン、主婦など約二十人。」

** 「会では老舎ゆかりの地を巡るツアーも毎年実施している。見所は老舎が五〇年から亡くなる六六年まで住んだ北京の灯市口西街にある旧居で、繁華街の王府井も近い。／老朽化がひどかった旧居は昔の姿に復元され、生誕百年の九九年二月、老舎記念館として開館した。舒済さんが館長になった。日本からも記念館整備のため募金活動が行われ、一千五百万円が市に寄付された。／日本では学会的組織として老舎の専門家が中心の「老舎研究会」がある。私も研究会の末席に連な

っており、今年七月、早稲田大学で開いた総会で老舎の死について〔☆本誌「老舎研究会研究発表会記録」参照〕話す機会をいただいた。〕／老舎は文革の嵐が吹いていた六六年八月二十四日朝、文学芸術界聯合会に行くと言って家を出て、翌日、太平湖で水死体で発見された。他殺か自殺で騒がれたが、前日の紅衛兵のつるし上げで激しい暴行を受けた後、入水自殺したというのが定説である。〕

***「老舎の非業の死にまつわる真相を探ろうと、傅光明という文学研究者が当時の関係者に精力的にインタビューし、「老舎之死」という本を最近二冊続けて刊行した。／この本に事件の成り行きを再現した記述がある。八月二十三日、文聯で老舎はじめ文化人が紅衛兵につるし上げに遭っている時、草明という女性作家が「老舎は『駱駝祥子』の版權をアメリカに売り、米ドルをもらった」と告発したことで、いきり立った紅衛兵が老舎にことさら激しい暴行を加えた。〕

***「延々と続く暴行と理不尽な詰問に老舎はついに堪忍袋の緒が切れ、罪名を記した胸のプラカードを外して地面にたたきつけたら紅衛兵にあたったとかで「老舎が紅衛兵に手を出した」と騒ぎがさらに大きくなった。文聯職員が紅衛兵の暴力から老舎を救おうと、「反革命現行犯」として警察の派出所に身柄を届け、連絡を受けた夫人が夜分、奇跡的に人力車を見つけて老舎を引き取りにいったという経過だった。／インタビューでは、当時過激だった女子紅衛兵も今は五十代の主婦で「深く反省している」という。つるし上げの首謀者は、北京大学から文聯に派遣されていた大学生が黒幕とずっと言われていたが、本人は強く否定している。〕

◇カット：「一昨年、北京の老舎記念館を訪問した筆者と舒済館長」

魯大鳴（聞き手）「江蘇省京劇院が老舎「駱駝祥子」を現代京劇に」

『世界週報』（11月5日、p. 61）

◇現代京劇「駱駝祥子」主演の陳霖蒼へのインタビュー。

『現代京劇「駱駝祥子 らくだのシアンズ」上演プログラム』

（11月6日、日本経済新聞社 文化・事業局 総合事業部、制作：楽戯社、A4版、40頁）

◆（鶴田卓彦）ごあいさつ 1頁／（孫家正）ごあいさつ p. 1／（河竹登志夫）祝辞 p. 2／（劉厚生）「駱駝祥子」の訪日公演を祝して p. 3／現代京劇「駱駝祥子」——長年待ち望まれた快挙（「京劇《駱駝祥子》學術討論會紀要」《光明日報》（2002年1月25日より抜粋）p. 4-5／主演紹介 p. 6-8／ものがたり〔☆梗概〕p. 9／上演舞台スチール写真；第一場 p. 10、第二場 p. 11、第三場 p. 12、第四場 p. 13、第五場 p. 14-15／松浦恆雄「京劇における「現代戲」」p. 16-17／**稲田直樹**「駱駝祥子と文豪老舎の死」p. 18-19 カット1枚（老舎）／訪日団名簿 p. 20-21／鍾文農・福井官奈訳「上演台本〈日中対訳〉」p. 22-39

鄭万鵬著／**中山時子・伊藤敬一・藤井栄三郎・李玉敬**翻訳監修

『中国当代文学史 建国より20世紀末までの作家と作品文学思潮を軸にして』

（11月10日、白帝社）

*「老舎は抗戦期に、伝統文化についても、民族主義についても新儒家に近い見解を得ている。建国初期には、また梁漱溟と時を同じくして新社会に対し鋭敏に自己の思想との同一性を認めている。」（藤井宏訳、p. 22）

◇その他の老舎言及箇所は、「『中国当代文学史』作家・作品索引」（p. 352）を参照。

樋口裕子「豊富胡同 — 老舎故居」

『懐旧的中国を歩く — 幻の胡同・夢の洋館』(11月15日、日本放送出版協会、第1章 北京 — 胡同模様 胡同への旅 — 変わりゆく古き北京の路地裏を歩く、p. 13—14)

*「老舎の日常の一端は、散文『養花』に垣間見ることができる。文中の老舎は、庭の草花を風雨から守るために大奮闘し、時には倒れた菊のために涙する。牛乳配達の人が「いい匂いですね」と褒めれば誇らしく思い、花見にきた友人たちに草花の株を分けたりするのを心から楽しむ。中国語を勉強しはじめて間もない頃、この散文を懸命に暗唱した私にとって、老舎の院子は、あこがれの老北京の庭そのものだった。／残念なことに、春はまだ浅く、新しくなった故居(旧居)には草花もなくて、『養花』の庭には程遠かった。それでも、これから季節がめぐれば、中庭は草花で埋まることになるであろう。老舎が植えた二本の柿の木は風雪に耐えてまだ残っている。夫人の胡潔青女史がこの家を「丹柿小院」と名付けたように、秋には赤い実をたわわに実らせることだろう。(p. 14)

◇「老舎故居」他カット写真3幅。

“補白”老舎(2)

辛彦

◆奥野信太郎と『駱駝祥子』

奥野信太郎“幻の翻訳”『新月』については前号(17号)の本欄で紹介したが、今回は奥野氏のもう一冊の未刊行翻訳本について記しておきたい。

今は懐かしいガリ版雑誌『日中文化』[「日

中翻訳資料」改題] No.38(日中翻訳出版懇会、1956年3月15日)の「翻訳企画」(p. 20)欄に、〈提出されている申請〉の一つとして、「駱駝祥子 老舎 奥野信太郎訳 岩波文庫(調整中)」が掲げられている。

奥野信太郎、老舎とくれば、誰もが先ず思い浮かべるのが、戦前の『ちやお・つう・ゆえ』(中央公論社、1941年)であろう。戦後、奥野氏が『駱駝祥子』の翻訳出版を企画したということは、これまで語られることのなかった逸話とあってよい。

なお、前掲『日中文化』には、奥野本『駱駝祥子』の内容を次のように記している。

「駱駝祥子という車夫のみじめな生活に材を採り、それに配する虎娘と福子と呼ぶ二人の女性をもってした小説であって、舞台は北京である。下層民の生活的苦惱とその苦惱にあつて希望をもちつづける人間の意志の強靱さを描いて余蘊がない。／運命と個人の意志との争闘を主題とし、しかもそのうちにおいて、人間のもつあらゆる弱点と人情の美しさとの葛藤を、もっとも克明に描いたものであり、多くの人々に感銘をあたえる点もまたここにある。その社会的意義は極めて大きい。／この小説が上梓されたのは民国時代であつたが、新中国になつて、社会主義現実主義を文学の立前とするにいたつて、なおかつ駱駝祥子のもっている意義ははなはだ深いものありとされ、多くの人々に愛読されている。」(p. 21)

ところで、これを掲載した『日中文化』の発行元「日中翻訳懇話会(東京都千代田区西神田二の二)」とは如何なる団体であつたのか。

当時、「新中国」の作家や研究者等の翻訳出版を中国と交渉する唯一の窓口が存在した。いわば、「新中国」原著者の翻訳権を獲得するための日本における総元締めが、他にもないこの「日中翻訳懇話会」であつた。

奥野信太郎にしても、「新中国」作家の作品を翻訳出版するに当たっては、やはりこの「懇話会」の承認を得る必要があったのである。

上の引用文は、奥野氏自身による「日中懇話会」に提出した出版申請内容の写しなのである。

しかし、この奥野本『駱駝祥子』の出版には、気にかかる問題が一つあった。

老舎の『駱駝祥子』には、すでに竹中伸による「既訳本が存在」していたからである。一本は戦前の新潮社版（1943年）、もう一本は戦後に装丁を一新してやはり同じ新潮社から出たもの（1948年）。また1952年には、新潮文庫の一冊としても竹中本が出版されており、奥野本が企画された当時においてもそれが絶版になっていたわけでもなかった。（1955年5刷）。

では、この竹中本を奥野信太郎はどのように見ていたのであろうか。

先に引用した〈出版申請内容〉の続きである。「すでに既訳本が存在するが、①誤訳と脱落の多いこと ②非文学的翻訳であること ③純北京語の原文であるにもかかわらず、訳文は不純な日本語が多いこと」の理由によって、当然改訳の必要がある。」

竹中本の「脱落の多いこと」はともかく、それを「非文学的翻訳」であり、「不純な日本語が多い」とは、これでは奥野信太郎による竹中本の「絶版勧告」ではないか。もっとも、奥野氏にこれほどまでに言わせるにはそれなりの事情もあった。

1952年、竹中伸が筑摩書房から『ちやお・つう・ゆえ』を出版する際に、竹中氏は戦前の奥野本『ちやお・つう・ゆえ』に一言も触れていない、これが奥野信太郎の逆鱗に触れたとしか言いようがない。

さて、「日中翻訳懇話会」であるが、奥野氏の申請を受理したものの、その処遇に困惑しつつも、「老舎の翻訳権が、他の原著者の場合よりも、明確を欠く事情もあるが、竹中伸氏の既

訳と、新しい奥野信太郎訳の企画の調整のしかたについては国内の問題であるから、会が自主的に解決する方向を申しあわせた」（ガリ版1枚物の『会』（1956年7月10日、日中翻訳懇話会））のである。

その結末は、皆さんご承知の通り。

とはいえ、奥野本『駱駝祥子』も読んでみたいと思われませんか。

まさか、どこかにその訳稿が眠っているなんてことはないでしょうね。

事務局便り

◇第20回大会は2003年7月25日に関西大学にて開催されました。人と題については、本号掲載の研究発表会記録をご覧ください。

◇実は今年は21周年です。研究会というものは継続すること自体なかなか大変なことなのです。このささやかな会が20年の大きな節目を無事「乗り越えた」ことを記念して、傅光明先生に特別講演をお願いしました。先生については最初の文章をご覧ください。

◇住所や所属を変更された方は、お手数ですが事務局までご一報下さい。

◇17号で事務局の住所を、間違っって自宅の住所を書いてしまいました。今回ののが本当です。

◇エッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちしています。奮ってご投稿下さい。

◇今号の編集についても、各位にご無理をお願いしました。ことに印刷をお願いした好文出版には、感謝とお詫びを申し上げます。

老舎研究会会報第18号（2004年7月31日）

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学中国語中国文学（日下）研究室

老舎研究会事務局

TEL：06-6368-1121（代表）

